

『伊勢物語』第二十三段「けこ」について

近藤 さやか

「キーワード ①『伊勢物語』 ②第二十三段 ③「笥子」 ④「家子」」

はじめに

いう二人妻を比較する話であることに注目し、「家子」説を再考してみたい。

一、「笥子」説

第二十三段は以下の通り三場面に分けられる構成である。

『伊勢物語』第二十三段は、幼なじみの男女が結婚した後、「男」が他の女のもとに通うようになるが、妻の和歌によって自分を案じる思いに感動し、他の女に通うのをやめ元通りになる話である。

以下、第二十三段に登場する妻を「大和の女」、「男」が新しく通うようになった女を「高安の女」と呼ぶが、「男」が高安の女のもとに通わなくなった理由は「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、てづからいぬがひとりて、けこのうつわ物にもりけるを見て、心うがりて、いかずなりにけり」とある。この「けこ」について現在多くの注釈書では「笥子」と漢字を当て、器のことだとしているが、「家子」説もあり、近年再考を促す論考がみられる。

本論では、『伊勢物語』第二十三段が大和の女と高安の女と

A むかし、みなかわたらひしける人の子ども、井のもとにいで、遊びけるをおとなになりければ、おとも女もはちかはしてありけれど、おとこはこの女をこそえめとおもふ、女はこのおとこをおもひつゝおやのあはずれども、きかでなむありける。さて、このとなりのおとこのもとより、かくなむ、

① つゝるつのるづゝにかけしまるがたけすぎにけらし
ないも見ざるまに

女、返し、

②くらへこしふりわけがみもかたすぎぬきみならずし
てたれかあぐべき

などいひく／＼て、つるに本意のごとくあひにけり。

B

さて年ごろふるほどに、女、おやなく、たよりなくなるまゝに、もろともにいふかひなくてあらむやはとて、かうちのくにたかやすのこほりに、いきかよふ所いできにけり。さりけれど、このもとの女、あしとおもへるけしきもなく、いだしやりければ、おとこ／＼と心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて、せんさいの中にかくれゐて、かうちへいぬるかほにて見れば、この女いとよけさうじて、うちながめて、

③風ふけばおきつしら浪たつた山夜はにや君がひとり
こゆらむ

とよみけるを聞きて、かぎりなくなしと思ひて、河内へもいかなりにけり。

C

まれ／＼かのかかやすに来て見れば、はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、てづからいるがひとりて、けこのうつつ物にもりけるを見て、心うがりて、いかずなりにけり。さりければ、かの女、やまの方を見やりて、

④君があたり見つゝをくらむいこま山くもなかくしそ
雨はふるとも

といひて見いだすに、からうじて、やまと人「来む」といへり。よろこびてまっぴに、たび／＼過ぎぬれば、

⑤君こむといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬ物のこ
ひつゝぞふる

といひけれど、おとこすまざるにけり。

幼なじみの男女が想い合つて結婚するA、「男」が高安の女の元に通うようになるが、大和の女が詠む和歌を聞き、高安通いをやめるといふB、高安の女の後日談であるCの場面に分けられる。この段は、『古今和歌集』九九四番歌と左注^{注1}によるBを核として構成されているといえ、『古今和歌集』にはなかつた高安の女を登場させた点が『伊勢物語』独自の展開である。

Bの最後で「河内へもいかなりにけり」と締めくくるものの、その後すぐに「まれ／＼かのかかやすに来て見れば」と訪れており、高安の女の様子を見て「心うがりて、いかずなりにけり」とある。高安の女からの和歌に対して、「からうじて、やまと人「来む」といへり」とは伝えるものの、結局「おとこすまざるにけり」と仲が途切れる。

大和の女の和歌で自分への思いを知った「男」が「河内へもいかなりにけり」と円満に終わってもいいものの、高安の女との歯切れの悪いともいえる後日談が語られるCの部分がつけられているのはなぜなのか。

「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて、てづからいるがひとりて、けこのうつつ物にもりけるを見て、心うがりて、いかずなりにけり」といふ高安の女の行為について「けこ」をどう解釈するかによって、「男」が何を「心うがり

て「通わなくなったのかも変わる。ちなみに、『伊勢物語』中で他に食べ物が描かれるのは、第九段の「みな人、かれいひのうへになみだおとしてほとびにけり」という乾飯でこの第二十三段と合わせて二例のみの特殊例^{注3}である。

まず、現在の注釈書で多く採られている「筥子」ではどうか。「筥子」は賀茂真淵の『伊勢物語古意』以降主流になった説である。

「けこは、或説に家の子にて、家人奴婢の事といへるも理りなきにあらねど、古本に餛子と書、万葉にも、家があれば筥に盛る飲をともあれば、飯饌の器でふ意也けり^{注4}子^{注5}は擔わり^{注6}こ^{注7}櫻子^{注8}などのと^{注9}う^{注10}つ^{注11}は^{注12}によ^{注13}そへいふ也^{注14}」

という解釈を受け継ぎ、藤井高尚の『伊勢物語新釈』（片桐洋一・山本登朗編『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第13巻 八木書店 二〇〇二年）で「けこ」は筥子にて飯もる器なり^{注15}としてゐる。

現代の諸注釈でも、池田龜鑑『伊勢物語精講』（學燈社 一九五五年）、上坂信男『伊勢物語評解』（有精堂出版 一九六九年）、森野宗明『講談社文庫 伊勢物語』（講談社 一九七二年）、渡辺実校注『新潮日本古典集成 伊勢物語』（新潮社 一九七六年）、石田穰二訳注『角川文庫 伊勢物語』（角川書店 一九七九年）、福井貞助校注訳『新編日本古典文学全集 伊勢物語』（小学館 一九九四年）、秋山虔校注『新日本古典文学大系 17 伊勢物語』（岩波書店 一九九七年）と多くがこの「筥子」説を採用している。

高安の女が自ら筥子に盛ることを「男」が不快に感じた理由については、高崎正秀氏は「矛の力」（『國學院雜誌』第五十四巻第一号 一九五三年四月）にて、「思ふに、この女は既に既婚者であり、家刀自として他にも男があり、少くとも娘分ではなかつたことを暗示してゐるものと認めるより外はない」としている^{注4}。石田穰二氏は『伊勢物語注釈稿』（竹林舎 二〇〇四年）で、「この箇所、女が手づから飯匙を執つて飯を盛つたのがなせ男の不興を買つたのか、ややわかりにくい。食物を盛り分けるのはその家の主婦の権限であり、この女はまだ若く、母親がいたのであろう、それをさしおいて飯匙に手を出したのは、この女の食い意地の張っていることを示すのであろう」というように、大和の女が「おやなく」とあつたことに対し、高安の女には描かれぬが親の存在を背景に見ている。

では、この「けこ」を「家子」で読むとどうなるか。

二、「家子」説

「家子」は『竹取物語』のくらもちの皇子に出された難題である「蓬萊の玉の枝」を作つた工匠が愁訴する言葉に「しかるに、禄いまだ賜はらず。これを賜ひて、わろき家子に賜はせむ」とあるのが初出とされ、第二十三段の家子説も筥子説よりも古くからある。「書陵部本和歌歌頭抄」「けことは家子也」に「闕疑抄」「けこのうつはもの、家子と書り」や、「拾穂抄」に「真名伊勢物語ニ饌子之器とあり家子也」と古注釈では、「古

意』の筥子説以前は「家子」として解釈されていた。^{注7}

岡崎正継氏は「けこ」の語誌（中田祝夫他編集『古語大辞典』小学館一九八三年）で

伊勢物語の例は、一般には「け」を「筥」「こ」を「籠」あるいは接尾語「子」と解して、飯を盛る器と解しているが、それだと、「けこのうつつはもの」は飯を盛る器の器となり、不自然である。色葉字類抄の例は、「人倫」の部に「験者」と並べて載せられ、「家口（けこ一家ノ者）也」と注せられている。類聚名義抄の籠も元来、食物を贈る意で、食器の意はない。食器をいう語は、たとえば黒川本色葉字類抄・雑物部に、「筥食器也ケ」とあるように、「け」であって「けこ」ではない。以上、いずれも一家眷属（ぞく）の者の意の「けこ（家子）」と見るのが自然で、食器としての「けこ」の存在は疑わしい。なお、第二例「ケコ」には共に平声単点がうたれ、清音である。

と「筥子」説に疑問を投げかけている。確かに、「筥子」が器の意味ならば、「けこにもる」で意味は通じるはずである。「けこのうつつわもの」と表現されている点に注意すべきである。^{注8}

竹岡正夫氏は『伊勢物語全評釈 古注釈十一種集成』右文書院一九八七年）で「けこ」（「けこ」とも）は家族や家来・召使と解するのが妥当。ここでは、女が、先の妻のごとく夫を偲ぶ歌を優雅に詠むどころか、一家眷属の者たちの食器に飯を盛り分けたりして、たまたま訪問して来ている夫など眼中にもなく、糠味噌女房にどっぷり浸かってしまっていたのである。

これでは貴族の男ならずとも「心憂がりて」足も遠ざかるのも当然だ」としている。所帯じみた行為を不快に感じたものとして捉えている。

山本登朗氏は、古注釈やその影響を受けた絵画資料、中世小説「窓の教」を考察し、「男」がどこから高安の女を見ていたか、つまり垣間見をしたのか、高安の女の目の前にいたのか、という点と「けこ」は「筥子」か「家子」なのかという二点の疑問を提示した。これら四通りの組み合わせから、「男」は高安の女の目の前で一家眷属の「家子」の食器に飯を盛っていたという解釈を導き出した。

原國人氏^{注10}は「蒙求」の説話「孟光荊釵」や、それを基にしたと考えられる『唐物語』第四「孟光、夫の梁鴻によく仕ふる語」と照らし合わせながら、「家子」説をとる。早乙女利光氏も、『唐物語』を例に「高安の女は格式張った客用ではなく、親しい家族に使用すべき器に飯を盛って、男に差し出した」と解釈するが、その後の用例調査の結果、この説を除外し、新たに家族を意味する「家口」説を唱え「高安の女は両親に飯を盛り分けていた」と考察する。^{注11}

このように、近年「家子」あるいは「家口」というように、「けこ」を「筥子」という器として解さない説が見直されている。^{注12}この「家子」について本文に立ち返って考察してみたい。

三、比べられる女

高安の女登場理由には大和の女との対比が考えられる。二人

の女の対比を顕著にみせるのは、同様の話を持つ『大和物語』
第百四十九段である。

むかし、大和の国、葛城の郡にすむ男女ありけり。この女、顔かたちいと清らなり。年ごろ思ひかはしてすむに、この女、いとわろくなりければ、思ひわづらひて、かぎりなく思ひながら妻をまうけてけり。この今の妻は、富みたる女になむありける。ことに思はねど、いけばいみじういたはり、身の装束もいと清らにせさせけり。かくにぎははしき所ならひて、来たれば、この女、いとわろげにてゐて、かくほかにありけど、さらにねたげにも見えすなどあれば、いとあはれと思ひけり。心地にはかぎりなくねたく心憂く思ふを、しのぶるになむありける。とどまりなむと思ふ夜も、なほ「いね」といひければ、わがかく歩きするをねたまで、ことわざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなむなど、心のうちに思ひけり。さて、いでていくと見えて、前裁の中にかくれて、男や来ると、見れば、はしにいであて、月のいとみじうおもしろきにかしらかいけつりなどしてをり。夜ふくるまで寝ず、いといたううち嘆きてながめければ、「人待つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるにいひける。

風吹けば沖つしらなみたつた山夜半にや君がひとりこ
ゆらむ

とよみければ、わがうへを思ふなりけりと思ふに、いと悲

しうなりぬ。この今の妻の家は、龍田山こえていく道になむありける。かくてなほ見をりければ、この女、うち泣きてふして、かなまりに水を入れて胸になむすゑたりける。あやし、いかにするにかあらむとて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯ふてつ。また水を入れる。見るにいと悲しくて、走りいでて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」といひて、かき抱きてなむ寝にける。かくてほかへもさらにいかで、つとゐにけり。かくて月日おほく経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりけるを、かくいかめをいかに思ふらむと思ひいでて、ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ、つつましくて立てりける。さてかいまめば、われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり、手づから飯もりをりける。いとみじと思ひて、来にけるままに、いかずなりにけり。この男はおほきみなりけり。

大和の女を「顔かたちいと清らなり」と容姿を褒め、経済状況を理由に通信始めた高安の女について「富みたる女」と述べる。「男」が垣間見た大和の女は「かしらかいけつりなどしてをり」と髪を梳かし、高安の女を垣間見ると「いとあやしきさまなる衣を着て、大櫛を面櫛にさしかけてをり」というみすばらしい着物に大櫛を前髪に挿すという様子であった。^{注13}また、大和の女は「かなまりに水を入れて胸になむすゑたりける」と水

を入れた金碗を胸に当てると熱湯になるといふ「おもひ」を抱いていたことが分かるが、高安の女は「手づから飯もりをりける」と自らご飯を盛っていた。「かなまり」という金属の碗と飯を盛る器も対照的である。

『伊勢物語』第二十三段でも、Bの冒頭で「さて年ごろふるほどに、女、おやなく、たよりなくなるまゝに、もるともにいふかひなくてあらむやはとて」と大和の女の親が亡くなり、経済状況が厳しくなったことを理由に高安に通い始める。Bの最後では「河内へもいかずなりにけり」と円満にまとめながら、Cでは、「まれ／＼かのたかやすに来て見れば」と高安を訪れており、問題としている場面を見て「心うがりて、いかずなりにけり」といふ。しかし、高安の女の和歌に対し「やまと人「来む」といへり」と期待させる返答し、結局「おとこすますなりにけり」と閉じる。高安の女の後日談であるCの「男」の態度は煮え切らないといえよう。

そもそも「男」は経済的な理由で高安の女の元へ通い始めたはずだ。自分の身を案じてくれている大和の女を愛しいと見直したところで経済状況は変わらない。『伊勢物語』には、貧しく出家する妻に何も贈れない紀有常の第十六段や、貧しい夫の妻となった女が袍を洗う際に破ってしまう第四十一段がある。

これらの段に登場する「男」は「ねむごろにあひかたらひけるともだち」(第十六段)や「あてなるおとこ」(第四十一段)として衣を提供する裕福な男である。貧富の対比が見られる段であるが、この第二十三段でも対比と経済状況が物語の展開に大

きく作用している。

本論での「けこ」の解釈は「家子」、「男」は目の前で「手づから飯匙とりて、家子のうつは物にもりける」行為を見たと解する。山本登朗氏の論と同様であるが、「男」が「心うがりて、いかずなりにけり」と感じた理由に、元々通う理由となっていた経済的な状態を加えたい。

つまり、「手づから飯匙とりて、家子のうつわ物にもりける」行為は高安の女の経済的な豊かさを象徴する光景であるが、家子の器にまで飯を分配することは、女主人として召使たちの食べる量を限定する吝嗇な一面をみせている。^{注14}

また、「おとこ」と心ありてかゝるにやあらむと思ひうたがひて」と大和の女に他の男の存在を疑って見ていたところ、一人で夫の身を案じる和歌を詠んだことに対し、高安の女は「家子」に囲まれている。高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつわ物にもりける」とは、卑俗というより吝嗇といえ、経済的豊かさを頼りに通っていた「男」にとつてうちとけて化粧もしなくなつた点に加えて幻滅した瞬間だったのではないか。

その後、高安の女は「男」に二首和歌を贈っているが、なぜ「男」が来なくなったのか、気付いていないような歌である。

四、第二十三段の和歌

「男」が見ていないはずのところ化粧をする大和の女、「はじめこそ心にくもつくりけれ、いまはうちとけて」とあることから、「男」の目の前で見られていることを承知の上で化粧を

しなくなつたと読める高安の女を比較する構図を確認したい。^{注15}

大和の女が詠む③「かぜふけば」の歌は独詠であり、「男」が聞いていることを知らずに想いを歌にしているが、大和の女は男と会えぬことを嘆き、訪れを待っていることを歌にして贈る。

第二十三段は「男」の歌は最初に大和の女に求婚する①「つゝゐつのゐつゝ」にかけしまろがたけすぎにけらしもない見ざるまに」のみである。その後、二人の女を見比べる「男」がいう「妹見ざる間に」は意味深である。この求婚を受ける大和の女も②「くらべこしふりわけがみもかたすぎぬきみならずしてたれかあぐべき」の「くらべこし」も「男」と比べた髪長さの指すが、大和の女は高安の女と比べられることになる。

「ゐつつ」に関しては、坏美奈子氏が「幼年時代の《象徴》としての「井筒」と、ずっと「思ひつつ」ある、そのまま変わらずにある、「ゐつつ」ある心のありさまを訴える言葉としての「ゐつつ」が、この一首の求婚歌のケースではじめて結びついたのではないか。「つつゐつのゐつつ」をめぐって、「つつある」「つつゐる」状態の「ゐつつ」が想起される可能性は十分ある。^{注17}と述べ、高安の女の歌にも④「君があたり見つゝをくらむいこま山くもなかくしそ雨はふるとも」、⑤「君こむといひし夜ごとにすぎぬればたのまぬものこのひつゝぞふる」といひし表現があることについて、「互いに「思ひつつ」、遠い昔から変わらせずに、離れている間も心の様は「ゐつつ」結ばれていた幼な恋の二人とは対照的で、またあわれだ」と述べている。坏氏が指摘した「ゐつつ」の表現はAの部分とCの部分で対照

的に見せている。

三部構成として場面が分けられる段であるが、和歌の表現は緊密に連繫し合っている。女を見比べることが「男」の和歌「妹見ざる間に」に象徴されているが、『万葉集』の類歌とされる高安の女の歌も④「見つつをらむ」と「男」がいる大和のあたりを見ようとするが雲や雨が障害となる。④「雨はふるとも」の雨は高安の女の涙の象徴であるが、他の和歌に見える水描写も事態の象徴と言えらるう。例えば、③「沖つ白浪」の浪は大和の女と「男」の波瀾の関係であり、①「井筒」は留まっている水、つまり昔からずっとその場にいる大和の女を象徴しているといえまいか。⑤「雨」に象徴される高安の女の涙は流れ落ちるものであり流動性を示していることと対照的である。また、幼なじみの男女が結婚を描いているAには①「過ぎにけらしな」、②「過ぎぬ」と時間経過を表す「過ぐ」が使われているが、「男」が来ない時間を詠む高安の女のCには、④「雨はふるとも」、⑤「恋つつぞふる」というように、④では「降る」と「経る」が掛けられ、⑤には時間経過のみを表す「経」が使われている。

丁莉氏は「結局、高安の女が詠んだ二首の歌は「待つ女」をモチーフにする佳作で、「風吹けば」の歌に何ら遜色ないのである」とし、「つまり、高安の女に歌を詠ませたのは、二人の「待つ女」に対する徹底的な対比によって、大和の女の優雅で純粹な愛情をいっそう強調し、一種の理想的な女性像をここで作り上げようとしたからではないか」と述べる。^{注20}

第二十三段の女二人は比べられながらも二人とも「待つ女」である。この対比構造は続く第二十四段の「あらたまの年の三とせをまちわびてたゝこよひこそにぬまくらすれ」と詠む「待ちわぶる女」との対比へ繋がっていく。

おわりに

第二十三段の高安の女の「けこ」を中心に、大和の女と高安の女の対比を考察した。賀茂真淵の『古意』以来「笥子」と器の意味でとられてきた「けこ」を今一度「家子」として捉え直し、「男」が高安に通う理由となっていた経済的狀態と絡めて、高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつつわ物にもりける」行為について卑俗というより吝嗇を「心憂」く感じたのではないかと論じた。

最後に、第二十三段を中心に前後章段との関係も見ておきたい。第二十三段を元に創作された謡曲『井筒』は、「男」Ⅱ在原業平とし、女も誰かと特定する注を付ける中世注釈書の姿勢と同じく、「大和の女」ではなく、「かぜふけば」と詠んだ女を「有常の娘」とし「人待つ女」と名乗らせる。第十九段は、『古今和歌集』で業平が有常の娘に通っていたとする詞書をもつ贈答歌で構成されている。第二十段は「やまとにある女」が「いつのまにうつろふ色のつきぬらむきみがさとは春なかるらし」と「うつろふ」ことを詠み、第二十一段は「こと心なかりけり」だった男女が和歌を詠み交わすものの、「をのが世」になりなければ」と破局してしまう。反対に、第二十二段では

「はかなくてたえにけるなか」だった男女の復縁が描かれる。

このような男女の時間経過と心の移り変わりを描く章段の中にある第二十三段は本稿で述べた通りである。二人妻の構図で大和の女との復縁と高安の女との破局が対照的に描かれる。第二十四段では一人の女に二人の男という登場人物の関係構図も第二十三段を反転させたものだが、第二十三段では二人の女がともに「待つ女」であったことに対し、第二十四段の女は「待ちわぶる女」であった。

そして、第二十四段の「かたるなか」の男女が離れ、女が待ちわびた原因は「おとこ、宮つかへしにとてわかれおしみてゆきけるまゝに三とせござりければ」という「かたるなか」から宮仕えするという経済的な理由であった。第二十三段も「ゐなかわたらひしける人の子ども」である。

田舎暮らしと経済的な理由による離別を基盤に第二十三段と第二十四段は描かれている。このことから、第二十三段の「けこ」を「家子」として「男」が高安の女の「手づから飯匙とりて、家子のうつつは物にもりける」行為を経済的理由から不快に思ったという考察を補いたい。

『伊勢物語』本文は三条西家旧蔵学習院大学所蔵天福本を定本にした小林茂美校注『影印校注古典叢書6 伊勢物語』（新典社一九七五年）を私に翻刻し、適宜句読点を付し傍線などをつけた。『竹取物語』と『大和物語』は片桐洋一・高橋正治校注・訳『新編日本古典文学全集』（小学館一九九四年）、歌集

は『新編国歌大観』CD-ROM 角川書店 一九九六年による。

注

1 『古今和歌集』九九四番歌・卷第十八（雑歌下）題しらず・よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらむ

ある人、この歌は、むかしやまとのくになりける人のむすめにある人すみわたりけり、この女おやもなくなりて家もわるくなりゆくあひだに、このをとこかふちのくにに人をあひしりてかよひつつかれやうにのみなりゆきけり、さりけれどもつらげなるけしきも見えでかふちへいくごとをこの心のごとくにしつついだしやりければ、あやしと思ひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて、月のおもしろかりける夜かふちへいくまねにてせんざいのなかにかくれて見ければ、夜ふくるまでことをかきならしつうちなげきてこの歌をよみてねにければ、これをききてそれより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる

2 片桐洋一氏の所謂「三段階成立論」で想定される『古今和歌集』以前の「原型伊勢物語」に第二十三段は存在していない。（『伊勢物語の研究（研究篇）』明治書院 一九六八年）『古今和歌集』以後成立した段として異論な

いことを確認しておく。

3 片桐洋一氏は「伊勢物語とうつほ物語」（『國文学 解釈と教材の研究』第43巻第2号一九九八年二月）で『伊勢物語』の中に食事する場面の特殊例として第九段と第二十三段を挙げており、当該箇所を「家子（けこ）」と表記している。

4 秋山虔氏は「伊勢物語私論―民間伝承との関連についての断章―」（『文学』第二十四巻第十一号 一九五六年十一月）で、この論を「合理的であるといえるのかもしれない」とし、「ここでは高安の女はおとしめられねばならぬ女性なのではない。かえって、愛する男を恋慕して待ちかね、二つの歌をうたいあげる切実ななげきの人妻として形象されている」と高安の女像を捉える。

乗岡憲正氏はこの指摘を受け、「手づから飯匙とりて……」考―「伊勢物語」〈高安の女〉の場合」（『國學院雑誌』第八十四巻第五号 一九八三年五月）で主婦としての高安の女と〈山の神〉信仰という民俗学的見地から飯匙に注目している。

5 『日本国語大辞典第二版』による。また、『日本語源大辞典』（前田富祺監修 二〇〇五年 小学館）によれば、「いへのこ」の漢字表記「家子」の「家」を音読みした語と説かれる。「いへのこ」がふるく「万葉集」にあるのに対して、「けこ」は「竹取物語」の用例が最も古い」とある。家子は「竹取物語」では工匠の弟子と解せるが、

妻子や召使を指す。また、「笥子」の初出としては『伊勢物語』の当該箇所が挙げられる。

- 6 『書陵部本和歌知頭抄』(片桐洋一『伊勢物語の研究(資料篇)』明治書院 一九六九年)、『闕疑抄』(『新日本古典文学大系17 竹取物語 伊勢物語』岩波書店 一九九七年)、『拾穂抄』(片桐洋一編『鉄心斎文庫伊勢物語古注釈叢刊』第5巻 八木書店 一九八九年)

- 7 絵巻・絵入り本にもこの家子説を享受したものが多く、飯匙を持って器に飯を盛る女と「家子」に該当する童が描かれ、その場面を男が垣間見する構図となっている。

- こうした構図は「異本伊勢物語絵巻」「スペンサーコレクション本伊勢物語絵巻」「小野家本伊勢物語絵巻」「中尾家本伊勢物語絵本」「東京国立博物館本住吉如慶筆伊勢物語絵巻」「嵯峨本第一種伊勢物語」「鉄心斎文庫本伊勢物語絵巻」「大英博物館本伊勢物語絵巻」にみられる。(羽衣国際大学日本文化研究所編集『伊勢物語絵巻本大成 資料編』角川学芸出版 二〇〇七年)

- 8 「けこの」部分の校異は、紅梅文庫旧蔵本藤房本「けの」(石田穰二氏『伊勢物語注釈稿』による)のみである。『万葉集』巻第二二四二番歌「有間皇子自傷結松枝歌二首」の一首である有名な「いへなれば けにもるいひを くさまくら たびにしあれば しひのはにもる」(家有者 笥尔盛飯乎 草枕 旅尔之有者 椎之葉尔盛)でも「け」であった。

- 9 「伊勢物語の高安の女——二十三段第三部の二つの問題」『國文學』(関西大学国文学会) 第八十八号 二〇〇四年二月

- 10 「伊勢物語」二十三段再考『中京国文学』第二十五号 二〇〇六年

- 11 「家口」か「家子」か——『伊勢物語』二十三段の新たな読解のために『言語と文芸』126号 二〇一〇年二月

- 12 第二十三段は多くの教科書で採用されている。文部科学省検定高等学校用教科書(平成二十三年度使用)の国語総合の教科書(三十点中現代文編を除く二十五種)では、Bまでを載せる教科書が三点(数研出版社版「国語総合」、明治書院版「高校生の国語総合」、桐原書店版「国語総合」)、第二十三段を全文掲載し、「笥子」説の脚注をつける教科書が八点(教育出版社版「国語総合 改訂版」、大修館書店版「国語総合 改訂版」、筑摩書房版「精選国語総合 古典編」改訂版)、「国語総合」改訂版)、「第一学習出版」高等学校 新訂国語総合 古典編)、「高等学校 改訂版 国語総合」高等学校 改訂版 標準国語総合)、「高等学校 改訂版 新編国語総合」ある。「家子」説は、東京書籍版「精選国語総合」・「国語総合 古典編」の二点が脚注で「家子。家族と使用人を合わせた一族。笥子(飯を盛る器)」とする説もある。」と「笥子」よりやや優勢に説明しているのみであるが、従来の「笥子」説を抑え、教科書という場に

- 13 「家子」説が出された意味は大きい。
『伊勢物語』では大和の女が「振り分け髪」の和歌を詠むが、この連想で両者の髪を対比させているのだろう。
- 14 「家口」説では、高安の女の家族を指し、親を亡くした大和の女と対照的であるが、親に飯を盛る行為は親孝行と解するのが自然だろう。
- 15 女を対比する話として、第十三、十四段がある。第十三段は「むさしあふみ」という言葉で「男」が武蔵で「逢ふ身」となった事態を察知する「京なる女」、第十四段は「男」の歌は自分を想ってくれるものを誤解する陸奥の女がいるが、東下りから東国章段へという一連の流れの中で対比されている構図がある。拙稿『伊勢物語』東下りと東国章段―「むさしあふみ」について―（『学習院大学大学院 日本語日本文学』第6号 二〇一〇年三月）
- 高安の女と第十四段の女の類似は森本茂氏『伊勢物語論』（大学堂書店 一九七三年）と前述の山本登朗氏の論にも指摘がある。
- 16 大和の女の③「かぜふけば」歌について本論ではほとんど触れていないが、拙稿『伊勢物語』の音楽」（『人文科学論集』19 二〇一〇年十月）でこの和歌が詠まれる場の視覚と聴覚の効果について述べてある。
- 17 II 篇第一章第一節3 『伊勢物語』二十三段「筒井筒」の主題と構成―「みつ」の風景と見送る女の心―
- 18 『新典社研究叢書199 王朝文学論―古典作品の新しい解釈―』新典社 二〇〇九年）
大和の女、高安の女が詠む和歌はそれぞれ二首、合計四首あるが、「君」という言葉が入っており、どれも「男」を指し示している。一方、「男」の和歌は一首のみで大和の女を表す「妹」が詠まれている。
- 19 『万葉集』三〇四六番歌・卷第十二（寄物陳思）「きみがあたり みつつもをらむ いこまやま くもなたなびきあめはふるとも」
- 20 第四篇第十章「待つ女」のイメージの変容」（『伊勢物語とその周縁』風間書房 二〇〇六年）
- 21 『古今和歌集』七八四・七八五番歌・卷第十五（恋歌五）業平朝臣きのありつねがむすめにすみけるを、うらむることありてしばしのあひだひるはきてゆふさはりかへりのみしければよみてつかはしける
- あま雲のよそにも人のなりゆくかさすがにめには見ゆるものから
返し
なりひらの朝臣
ゆきかへりそらにのみしてふる事はわがふる山の風はやみなり
- （こんどう・さやか 博士後期課程）